

桜蔭俳話会 一月句会(第三七二回)

平成三十一年一月二十日(日)

会場・旭区民文化センター(サンハート)

【推薦句】

雑踏の黒衣多しや寒の入

ヤエ子

潮の香のウエットスーツより御慶

才美

一片の肉持てあます薬喰

かほる

【添削句】

【原句】初鏡コンマ二ミリの髭を剃る 秀夫

友子

【理由】初鏡の句には雅な女性を詠んだものが多い。男性を詠むことにした着眼は良い。俳句では、なるべく「を」は使わない。髭を剃るではシェーバーの性能を述べるだけである。

【添削案】初鏡コンマ二ミリの髭の嵩

【原句】江ノ電の人に揉まるる獅子頭 才美

友子

【理由】駅間隔の短さと込み具合の描写には「江ノ電」という選択は巧であるが、この句の上五は明確に切った方が良い。

【添削案】江ノ電や人に揉まるる獅子頭

【原句】成人日硬き革靴へと朝日 秀夫

友子

【理由】上五の成人日は六音の「成人の日」で良いのではないか。はじめはゆったりし、硬い革靴に朝日が当たることによって段々緊張感が増すのである。

【添削案】成人の日硬き革靴へと朝日

【原句】掬ひ抱く嬰の佳き香やお元日 才美

明美

【理由】抱かれた嬰児が佳き香であることは当たり前である。あっさりとした描写すれば足る。

【添削案】掬ひ抱く嬰のかほりやお元日

【原句】松過ぎてとまれ珈琲淹れにけり 秀夫

眞壽

【理由】作者の説明によれば、「とまれ」は「ともあれ」とのこと。

【添削案】人日のとまれ珈琲淹れにけり

【原句】定位置に蹲る猫寒日和 ヤエ子

友子

【理由】言葉の順番の整理

【添削案】寒日和定位置に猫蹲る

【原句】新年や生きていたら兄に会ふ 直子

【理由】中六にする積極的な理由がない。

【添削案】新年や生きてをりなば兄の声

【原句】江ノ島を鳶の大円冬夕焼 幸

幸

【理由】言葉の整理

【添削案】江の島の鳶の大円冬夕焼

【原句】宴会は飲み放題や女正月 友子

友子

【理由】言葉の整理

【添削案】宴会は佳境となりし女正月

【原句】譲られし席のぬくもり春近し 幸

幸

【理由】「ぬくもり」と「春近し」は近いイメージである。

【添削案】譲られし席のほっこり春近し

【原句】白きカップに残る寒紅拭ひけり 友子

友子

【理由】色の対比が直接的で強すぎる。

【添削案】祝杯に残る寒紅拭ひけり

【原句】買初めや終活ノート躊躇して 友子

友子

【理由】言葉の整理

【添削案】買初めは終活ノートなほ躊躇

【原句】初富士の見ゆる座席や我職場 直子

直子

【理由】言葉の整理

【添削案】初富士の見ゆる窓辺や執務室

【原句】塗椀にかつお菜浮きし雑煮餅 明美

明美

【理由】塗椀は正月料理の句には付きもの

【添削案】浮かびしはかつお菜こんがり雑煮餅

【原句】酷寒や一言多い見舞妻 眞壽

眞壽

【理由】言葉の整理

【添削案】酷寒の一言多き見舞ひ妻

【原句】枇杷の花主なき庭の手水鉢 ヤエ子

ヤエ子

【理由】言葉の整理。手水鉢が突然出てくる。

【添削案】枇杷の花空き地の庭の広さかな

【原句】階段も母のリハビリ日向ぼこ 直子
【理由】並列の「も」はなるべく避ける。
【添削案】階段の母のリハビリ日向ぼこ

【原句】 初句会色賑やかな菓子並ぶ 邦子
【理由】単に「並ぶ」で処理するのではなく、「並ぶもの」を挙げた方が良い。

【添削案】初句会色賑やかな菓子と笑み

【原句】褒められて土産に持たす節料理 友子
【理由】褒める主体と土産に持たせる主体の二者がいる。主体を「お節料理」に統一する。

【添削案】褒められて土産となりし節料理

【原句】蕎麦もはや糞となりけり去年今年 秀蕎麦
【理由】言葉の選択。単に「蕎麦」と具体的に言ったのでは、当たり前過ぎて詰まらない。

【添削案】かたちあるもの糞となりけり去年今年

【原句】初吟詠百一歳の背筋伸ぶ ヤエ子
【理由】意味の解る範囲内で言葉を省略し、リズムをつける。

【添削案】初吟や百一歳の背筋伸ぶ

【原句】今日もまだ生きてうれしや小豆粥 眞壽
【理由】俳句では直截に作者の感慨を述べることは抑制する。

【添削案】今日もまた生かされてをり小豆粥

冬菜買ふ祈りのあとの修道女 幸
声高な歴史の主張お元日 才美
富士塚は森の外れや初詣 友子
待ち伏せの猫は知らずに寒鴉 眞壽
置炬燵長生きの足投げ出しぬ 直子
追羽根の亡命ひとつボンネット 明美
成人の日椅子はきつちり並びあり 秀夫
人日や生命線にある地平 才美
門松の華やぎひとつ老いの家 明美
代筆とおぼしき賀状卓の上 幸
連弾の琴に始まるお元日 直子

人日や池に手斧の落つる音 秀夫
幼とのハグに始まり年迎へ 友子
松籟のしばし静もる初日かな 才美
挨拶をスマホに返す初電車 直子
松過ぎのピアノの音の目覚めかな 邦子
ビル火事や屋上に立ちし人の影 明美
寒星や見つむふたりの影ひとつ 友子
冬枯れの広場に光る水の糸 直子
初富士や安名ひとつ授かりぬく かほる
染み渡るコントラバスやニューイヤー ヤエ子
売初のアニメのショーの虜かな 明美
がやがやと話す友あり冬苺 直子
合鴨のよちよち歩き通学路 ヤエ子
玄関にたたら踏みけり寒の朝 かほる
よく晴れて手は懐に勤め先 直子
生きてゐる知らせの一つ賀状来る 眞壽
平成やこれが最後の年賀状 邦子
街外れ地蔵の肩の掛飾 ヤエ子
夕暮の下校の路を毛糸帽 邦子
まるまると赤子太りし青木の実 眞壽
初社鈴の音乾き切りもなし 友子
多羅葉を一枚享けし初社 友子
初鴉大集合の収集日 かほる
ただ一つ残れり障子貼り替えし 邦子

(文責 代表 増田 守)
(欠席投句 古野明美、京林眞壽、稲葉幸)